



昇進は、前進か。

「おめでとう。よかったな」

白木のカウンターでビールをつぎ合い、グラスを掲げた。気心のしれた同期が部長昇進を祝ってくれるというので、めったにこない神楽坂の小料理屋にきていた。

「同期じゃお前が出世頭じゃないか」

友人がグラスを空ける。

「早くたってな。研修受けただけでげんなりだよ。現場は遠のくし、負担は増えるし、給料上がるならまだしも…」

「まあなあ。でも、これでその先の道も開けるだろ。お前なら昇れるよ」

「そんな気更々ないけどな。」

それより、お前ほんとに決めたの？」

「うん、辞表も出した。来月いっぱいだ」

同期が辞める。北海道に移って農業を始めるという。経験ナシ。不安はと聞けば、カミさんも働くし、家族三人くらい何とかなるだろ、と。二十年突っ走ってきたが、ふと立ち止まると、自分のかいてる汗が本当に世の中の役に立っているのか。ここ数年疑問が消えず、思い至ったらしい。新しいことやるなら今だと、その気持ちはよくわかる。俺はただ、その疑問を見て見ぬふりをしているだけだ。

「勇気あるよな」

「いや、仕事…っていうか会社に負けたんだな。うまくいってりや疑問も湧かん」

とって笑い、ビールを飲み干す顔はどこか暗れ暗れしていた。アクションを起こした者の顔。挑戦する者の顔。

「そうだ、これ、昇進祝い」

深いエンジンにボンネットがあしらわれたシルクのネクタイだった。

「これからは海外出張も増えるだろ。」

いつも妙に変わったタイ締めてるけど、仕立が良さそうなスーツが泣いてるぞ。日本人のセンスが疑われちゃうからさ」

結局その日は、三時頃まで深酒した。

しかし、彼が去るのか。俺が残されるのか。

家路のタクシーに揺られながら、運転手の何気ない言葉が妙に耳から離れなかった。「この選手、今度イタリア行くみたいですね」

生き方を、包む。

D'URBAN

www.durban.jp